

# 「白の女王」シリーズ・モームと

## 戦間期英国のインテリア・デコレーション（その1）

大谷 伴子

### 1 戦間期英国の変容したソサイエティ？

#### ——新たなホステスたちが欲望したもの

2022年、2019年の映画版の続編として、『ダウントン・アビー／新たなる時代へ』映画版第2弾が公開された。2015年TVドラマのファイナルが終了した後もスペシャル番組や映画版を産み出しつづけ、英国だけでなく世界中を魅了したこのシリーズの放映が始まったころ、このTVドラマが、英国の経済誌に取り上げられたことがあった。2012年2月25日号『エコノミスト』誌に掲載された「コスチューム・ドラマ——富裕階級的生活」という記事だ。この記事によれば、格差の拡大が進み富裕層に対する敵意に溢れた21世紀の現在、豪華な貴族階級を美化したドラマなど売れるはずなどないという予想に反し、英国発の上流階級の優雅なライフスタイルを描いたTVドラマが人気を博し、その人気は英国にとどまらず大西洋を跨いでさらに太平洋も超えてグローバルに受容・消費されたという。英国ITVで放映されている『ダウントン・アビー』と1970年代にITVで放映され人気を博したシリーズ『アップステアーズ・ダウンスステアーズ』の（なぜか）BBCでの続編だ。なぜ、英国の支配者階級の煌びやかな生活とそうした豪華な暮らしを可能にする英国階級社会の下部に存在し可視化されない召使たちの労働を描いたTVドラマに一般視聴者は魅了されるのだろうか。このような明確な階層制度を描いた映像文化に現代の格差社会を生きるふつうの人びとがみいだすものは何か。『ダウントン・アビー』のプロデューサーであるギャレス・ニームは、カントリーハウスものなどのTVドラマで描かれる階層や「職場」における序列関係に、視聴者は、反感や嫌悪

ではなく、現実よりもまだましな秩序だった階級社会をむしろ許容しているのではないかと指摘する(“Costume Dramas”)。同様のことは、2011年1月16日付『デイリー・メール』紙に掲載された、富裕なアッパー・ミドル・クラスのお屋敷に15年召使として働いた母親をもち自らを「100%労働者階級」と称するジャネット・ストリート・ポーターによる記事「どうして私たち英国人は、こんなにも召使に憑りつかれているのか？」でも指摘されている(Porter)。現代のグローバル化する世界における格差社会に比べれば、衣食住の保証がある過去の貴族社会における召使のほうがよほどましだということになるだろうか。

ただし、『ダウントン・アビー』において物語の舞台であるダウントン・アビーというカントリーハウスの「ホステス」である伯爵夫人がアメリカ人であること、そしてこのカントリーハウスの存続を夫人の資産すなわちアメリカン・マネーが救ったことが物語の前提となっていること、本論はまずこの点に注目したい。20世紀初頭の英国貴族社会にアメリカという他者が侵入しているということ、このような地政学的空間における変動がこの映像テキストでも明示的に提示されていることの意味についても、考える必要があるのではないかと、いうことだ。かつて、パトリック・バルフォアがその著書『ソサイエティ・ラケット——モダンな社会生活の批判的概観 (*Society Racket: A Critical Survey of Modern Social Life*)』(1933)においても述べていたように、ロンドン社交界は「アメリカ人のシンディケート (American syndicate)」に支配されていた (Balfour 137)。社交界を差配していたのはアメリカン・マネーを背景にロンドン社交界に進出した新興「ホステス」たちであったということだ。そういえばサマセット・モームの円熟した風習喜劇『おえら方 (*Our Betters*)』(1915)においてこうしたアメリカ人「ホステス」が批判的に描かれ諷刺の対象となっていたことがあった。<sup>1</sup> ただし、バルフォアがここで指摘しようとしていたのは、そうした状況下にあっても英国の「ホステス」たちも少数とはいえ存在感を示していたことだ。そして、そのなかに、本論が取り上げようとするシリー・モームの存在があった (Balfour 137) ——シリーは、

その名からもたやすく推察できるようにサマセット・モームの妻であった。

本論は、第一次世界大戦後ロンドン社交界に登場したこの新興「ホステス」という存在を手がかりにしながら、シリー・モームというソサエティ・インテリア・デコレーターに注目することにより、「働くレイディ」というフィギュアが表象する戦間期英国の歴史状況を再吟味することを試みる。言い換えれば、20世紀英国帝国主義をめぐるグローバルな地政学とその「大転換」の歴史的過程をあらためて解釈し直す作業を開始することを本論は目的としている。とはいえず、シリーの元夫であるサマセット・モームが劇作家としての仕事をやりつくしたあるいはその筆を折る契機としてみなされる芝居『コンスタン・ワイフ (*The Constant Wife*)』(1926)のヒロインが「働くレイディ」として着いた職業が、インテリア・デコレーターであったのだが、この職業の社会における台頭は、戦間期英国のカントリー・ハウス・ソサエティあるいは地主貴族階級の置かれた状況と、実は、密接に関係していたのだということ、そしてその社交界を差配する女性たちのタイプにも変容があった、このことから本論の議論をはじめたいと思う。

第一次世界大戦後の英国社交界のサヴァイヴァルと英国人のスノビズムを結びつけて論じ、大戦後、新興成金や新たに台頭・形成されつつあった下層中産階級等々が、あの手この手（不正な手段をも含めて）を尽し社交界という特権的な集団・空間になんとか参入・侵入しようとしていた当時の英国の状況を論じるバルフォアは、戦間期の英国の社交界を取り巻く階級の再編製の動きを新たな「ホステス」たちの英国社交界における台頭を産み出した条件としている(Balfour)。以下しばらくこのセクションでは、戦間期英国の社交界を批判的に論じた1930年代のバルフォアをはじめとするおもだった諸先行研究を下敷きにして手際よくまとめ、大戦の戦渦がとりわけ上流階級・地主貴族階級におよぼした少なからざる影響について概説した社会史学者パメラ・ホーンの論点を確認してみよう。その著書『カントリー・ハウス・ソサエティ——第一次世界大戦後の上流階級の私生活 (*Country House Society: The Private Lives of England's Upper Class after the First World War*)』(2013)の「主要なロン

ドン・ホステスたち (Leading London Hostesses)」において、1920 年代のロンドンでみられた「大転換」を指し示すさまざまな変化のひとつが、新たな種類の社交界ホステスたち——有名になることに野心的でときにアメリカ出身——の登場に、なかでも突出した 4 人の新しいスタイルのホステスたちに、注目している。彼女たちは、それぞれ非常に異なったやり方ではあるものの、戦間期英国の変容したソサイエティにおけるロンドン社交界に活気を与えることに貢献した、ということになろうか (Horn 186-202)。

1920 年代には、保守党のみならずその時々政権与党の政治家との太いコネクションを有するロンドンデリー侯爵夫人をのぞいて大戦以前の豪奢なもてなしを継続できた貴族のご婦人たちは、ほとんど、みあたらなくなっていった。ロンドンデリー侯爵夫人以外の貴族の令夫人たちは戦後もなんとか友人たちにおもてなしを供したのだが、ロンドン社交界のシーズンにおもむきそうしたおもてなしを受ける人びとは、実のところ、令夫人たちが催す伝統的なディナー・パーティ、舞踏会、観劇などの集まりに定期的に参加しながらも、「退屈なおえら方」の集まる「ひどく寒い部屋」でのこごえながらの会合に徐々にうんざりし始めたらしい。いわば、このような類の貴族的なおもてなしは、1920 年代に新たなタイプのホステスたちの出現によって、影の薄いものとなっていったという。彼女たち新参者は、社交界とのコネクションを確固たるものとするためにおもてなしの必要性を主たる動機として参入せんとした。なかでも 1920 年代に登場したとりわけ同時代の人びとの目を引いたという 4 人のホステスが、重要だ。イギリス人であるグレンヴィル閣下夫人とレイディ・コウルファックス、そしてアメリカ生まれのレイディ・キュナードとコリガン夫人である (Horn 190)。

新たなホステスたちが欲望したものとはなんだったのか。4 人の新参ホステスたちが関係を育もうとした人びとのグループはそれぞれ異なっていたものの、社交界で自身が際立つ存在になりたいそして豪華で目を見張るような友人・知人を有するようになりたいという点は共有していたようだ。たとえば、キュナード・ラインの創始者の孫と結婚したレイディ・キュナードは、芸術とりわけオ

ペラや演劇の促進に力を入れようとしていたため社交界でも芸術関係に通じたネットワークを求めた。十分な教育を受けたとはいえないローラ・コリガンは、アメリカ人鉄鋼王である夫の富を背景にさまざまなつてをたどって、ロンドン社交界に入り込もうとしたのだが、当初はうまくいかなかったらしい。だが、エドワード7世の親しい「友人」であるケプル夫人（アリス・ケプル）が海外移住するためにグロヴナー・ストリートにある屋敷の賃借人を探していると聞きつけ、その膨大な富をもとに、経験を積んだ執事込みで屋敷の賃借人となりさらに追加料金を支払い、ケプル夫人の来客帳というネットワーク参入の要ともいえる情報源を入手した。こうしてコリガン夫人は社交界侵入の第1歩を踏んだ（Horn 191-95）。このようにアメリカ人がその富を背景にロンドン社交界を占有しようとしていることと冒頭で触れた『ダウントン・アビー』の伯爵夫人の出自とが、微妙に、重ならないでもないこと、そして、バルフォアが皮肉たっぷりに指摘したように、ロンドン社交界は「アメリカ人のシンディケート（American syndicate）」（Balfour 137）に支配されていた。

このとりわけ突出していたとされる4人の新参ホステスのうち3人目はグレンヴィル閣下夫人である。グレンヴィル閣下夫人は、エドワード7世の友人であるグレンヴィル卿を父にもつ政治家の夫が有するゆるぎないコネクションに支えられて、英国王室一家やヨーロッパの王室、由緒ある貴族や政治家、外交官等々を招待客とする豪華なパーティを供していた。このような英国のみならずヨーロッパにも広がるエリート層とのコネクションによって、彼女からの招待状は必ずしも彼女に好意を抱いていない人びとにも拒否されなかったらしい（Horn 196-98）。

ただし、本論が4人のホステスのなかで特に注目したいのは、4番目に挙げられているレイディ・コウルファックスの欲望とそのお仕事を通じたキャリアだ。女性とマテリアル・カルチャーとの関係性を主題化してみせたデザイン史家ベニー・スパークも言及しているように（Spark 150）、レイディ・コウルファックスことシビルは、本論が取り上げる「白の女王」シリー・モームとともに、戦間期1930年代の英米社会におけるソサイエティ・インテリア・デコレーター

たちの英国の代表的な存在だったからだ。これまであげられた3人の新たなホステスたちとは違って、シビル・コウルファックスは、堅実・実直な中産階級出身で資産状況も控えめなものであった。シビルの夫は第一次世界大戦以前には非常に成功した特許専門の弁護士であったものの1920年代までには聴力障碍が進行し商業取引の不振から仕事の機会は激減し、結果、収入が大幅に縮小することになる、そして、1920年代末、この一家の財政問題を解決すべく自ら商売を始めたのがシビルだったのだ。まず、シビルは、魅力的とはいえさほど広くはないチェルシーの自宅で、その限られた収入にもかかわらず、時の著名人——とりわけ、ブライト・ヤング・ピーブルのひとりであるロエリア・ボンソンビーが「知識人」と名指した人びと、すなわち文学、芸術、音楽界で名を卓越した人びとや時のおもだった政治家たち——をもてなそうと心に決めた。何百通という招待状を送り、著名人を招待し彼らとのコネクションを産み出そうという執拗さや、その出自から批判や中傷も少なからずあったものの、シビルの多読ゆえの博識さや芸術の鑑識眼は彼女を批判する向きからも評価されていたという。このような有名人やセレブを追い回す傾向は批判的にとらえられるとはいえ、シビルの本質は俗悪に対する嫌悪やいかなるタイプの美でもすばやく敏感に楽しめること、パブリシティや悪意・策略を毛嫌いすることなどに見出すことができる（Horn 198-202）。こうした、美に対する彼女の感度が、いずれ開始する彼女のソサイエティ・インテリア・デコレーターのビジネスへの欲望に通じている、ということは次のセクションで述べたいと思う。

こうして、第一次世界大戦後、旧来の貴族の令夫人とは異なる新たなホステスたちが、伝統的な領地という土地から産み出された富とは異なるマナーを主たる武器として、社交界に進出していった。戦後の経済的な激変により、多くのカントリーハウスとともに社交界の舞台となったロンドンの屋敷は売却され、収入が激減するとともに貴族やジェントリたちが行使した権威も衰退し、戦前社交界を差配していた貴族とその令夫人たちもロンドン社交界のシーズンでも限られた役割しか果たせなくなっていく。切ないことに短期間借家住まいをしたりせめて娘の社交界デビューのためにと特別な努力をしたりするのが精

いっぱいだったのだ (Horn 188)。このように、戦間期英国の変容した社交界を差配する女性たちのタイプにおける変容を規定したのは、カントリー・ハウス・ソサエティあるいは地主貴族階級の置かれた歴史状況、とりわけ、経済的に衰退・悪化した状況であった、そして、その新たなソサエティのありようは、レイディたちのお仕事とも密接に関係していたのだ。

## 2 英国レイディたちのさまざまなお仕事

新たなタイプのソサエティ・ホステスたち、たとえば、シビル・コウルファックスが創始したお仕事について述べる前に、戦後のレイディだけではなくジェントルマンたちの就業状況について少々述べておいてもよいだろう。第一次世界大戦後、借地代の下落や増税といった経済的な状況の変化により伝統的な地所経営だけでは収支の帳尻を合わせることが困難になったため、上流階級の男性たちはさらなる収入を求める必要にかられ、銀行や民間企業、当時の英国の経済状況の傾向を反映しているような、たとえば、保険会社や銀行、鉄道会社といった企業の重役の地位につくものが増大したという。ひとりで何社かの企業の重役を掛け持ちしたりするものも少なくなく、企業側もこうした企業の綱領に貴族たちの名を掲げることで、企業への信頼や潜在的な投資家に対してそのリスペクタビリティを保証することができるのでは考え、上流階級の男性を重役会に採用することに熱心だったらしい (Horn 226-27)。

このように男性エリートたちの間にも就業に対する態度の変化がみられたのだが、就業に対する姿勢のなかでも最大の変化は、上流階級あるいは社交界の女性たちの間にみられたものだった、とりわけ古いタイプのステレオタイプのイメージに抵抗した若い女性たちあるいはモダン・ガールの間に (Balfour 140-53; Horn 231)。就業を目指したお嬢さまたちは、第一次世界大戦中の経験により自立への欲望や個人の自由という意識が助長されたというが、それ以上にバルフォアの言葉を借りれば、戦争終結の年に部分的にとはいえ参政権を得た女性たちがあらゆる類の職業に足を踏み入れるのは時間の問題だったという



こが、21 歳以上の全ての女性に参政権が拡大された 1928 年には、ある女性のクラブの会員名簿の職業欄には、飛行士、建築家、解剖学の教授、法廷弁護士、炭鉱所有者、電気工事請負業者、金融業者、ハウス・デコレーター、クリーニング店経営者、薬剤師、絹織物商人やワインの卸売業者などが並んでいたという。また、バルフォアによれば、若干大ざっぱな一般化かもしれないが、社交界のお嬢さまがたがなんらかの職業に就くことは例外ではなく、大型な有名店だけでなくより小規模でおしゃれなドレスショップや帽子店花屋、書店などのショップ・ガールとしての働くこともいとわなかったという。さらに、店舗で働くだけではなく、自分の名を冠したお店を開く社交界のレイディたちも少なからず存在したということだ。たとえば、香水や結婚式の贈り物に特化した「オードリー」という店を開いたダドリー・コーツ夫人、「ポピー」というドレスショップを開いたベアリング商会のご令嬢ポピー・ベアリング等々があげられている (Balfour 148)。

戦間期英国における女性の就業の動機は、伝統的な旧タイプの女性イメージへの抵抗であったり自立願望あるいは時代の先端をゆこうとする欲望であったりするだけではなく、現金を稼ぐ必要に迫られたということにもあったようだが、ホーンは戦間期の女性がついた職業をいくつか挙げて解説している。まずは、先ほど取り上げたレイディたちが開いたショップが属するファッション業界ということになるだろうか、次に、経済的状況を動機とした女性たちが主として関わったジャーナリズムということがあげられている。たとえば、ウィストン・チャーチル夫人の妹ネリー・ロミリーは 1920 年代に財政困難に直面し、義兄より借金をして帽子店を開いたという。バーバラ・カートランドも同様の財政難から帽子店を開くものの失敗し、その後ビーヴァーブルック卿所有の『デイリー・エクスプレス』のゴシップ欄に寄稿した後、小説を執筆するようになった。ナンシー・ミットフォードがジャーナリズムに手を染めたのも現金の不足が原因だったのであり、当初は社交界向けの雑誌のゴシップ欄に匿名で寄稿していたという。ほかの多くの社交界の女性たちがジャーナリズム業界に足を踏み入れた動機は財政的な事情であったようだ。『タトラー』、『バイスタンダー』、



『ヴォーグ』といった雑誌の内容からファッション業界にかかわる多くの社交界のレイディたちが関わっていることが取り上げられている (Horn 232-35)。

ファッションやジャーナリズム業界に続いて当時のお嬢さまがたがキャリアとして求めたのは、俳優業だった。たとえば、1922年に『グロリアス・アドヴェンチャー』に主演したレイディ・ダイアナ・クーパーは、パイオニア的存在でマックス・ラインハルトの無声映画『ミラクル』に出演したり英国のみならず米国やヨーロッパをツアーで回ったりして成功した稀な例であった。俳優業を求めながらさほどの成功を経験せずにブライト・ヤング・ピープルに属してその欲望を満たそうとしたお嬢さまがたも、少なからず、存在したのであり、たとえば、ブレンダ・ディーン・ポールやエリザベス・ボンソンビー、そして、ウィンストン・チャーチルのご令嬢の名があげられている (Horn 237-39)。<sup>2</sup>

ただし、そうしたファッションやジャーナリズムや演劇界のような華やかな業界とは一線を画した職種が最後に挙げられていることに注目しよう。すなわち、インテリア・デコレーターやガーデン・デザインといったもう少し堅実ともみえるキャリアのチャンス。<sup>3</sup> 前セクションで新参ホステスのなかでミドル・クラスでありながらその美に対する感度やセンスと趣味・テイストで成り上がったシビル・コウルファックスが経済的な事情から始めたのが、まさにこのインテリア・デコレーションの職であったのだ。社交界の女性と職業の関係としてとりわけ重要なものとして提示されたキャリアの代表的な女性として挙げられているのが、インテリア・デコレーターの草分けとしてサマセット・モームの妻シリー・モーム、そして前述のレイディ・コウルファックス、さらにガーデン・デザイナーとしてノラ・リンゼイである。シビル・コウルファックスとノラ・リンゼイは経済的な事情からそのキャリアをはじめたのだが、シリー・モームの場合は2人とは事情が異なっていたようだ (Horn 239)。シビルの場合は、45歳で不承不承この職に就きかなりのストレスを抱えながら、年収2000ポンドを目標としてかなりのハードワークを自らにも雇用者にも課していた。経済的苦境を乗り切ろうというシビルの固い決意とビジネス・センスが実を結び、彼女のビジネスは成功し、1930年代の終わりには才能豊かな若手

デコレーターであるジョン・ファウラーとの協働によりメイフェアにおける著名なインテリア・デコレーションの会社であるコウルファックス&ファウラーを設立するまでになった (Horn 242-43)。

ここまで、シリー・モームという伝説的なインテリア・デコレーターが誕生した戦間期英国の社交界、ならびに、新たなホステスとしての英国レイディたちが欲望したものとお仕事の状況について、簡単にスケッチしてみた。次のセクションでは、いよいよシリー・モームというフィギュアについて、取り上げる。シリーは、先ほど社交界のレイディが自分の名を冠した店を次々とオープンしたことを指摘したバルフォアの議論にも、実は、「シリー」と冠したデコレーティング店をはじめた女性として登場していた存在でもあった (Balfour 148)。<sup>4</sup>「白の女王」シリー・モームの存在はどのような意味を指し示しているのだろうか、別の言い方をするなら、戦間期英国のインテリア・デコレーションをある意味で代表する彼女のお仕事は、いかなる 20 世紀初頭の「大転換」を孕んだ歴史性やグローバルな階級再編とのアレゴリーとなっているのだろうか。

## Notes

1 モーム『おえら方』におけるアメリカ人「ホステス」の批判的描写については、大谷所収の「『セルフリッジ百貨店』とウェスト・エンドの劇場文化」を参照のこと。

2 ブライト・ヤング・ピープルという文化現象については、Taylor および高田・大道・井川・大田を参照のこと。

3 戦間期にレイディのお仕事として特権化されたインテリア・デコレーターというお仕事は、21 世紀現在日本の働く女性の状況にどのようにつながる可能性があるのか、ということに少し触れておこう。おしゃれなインテリア・コーディネーターになりたい! と 1980 年代そのような欲望が日本で流通したことが、かつて、あった。バブル華やかなりし時代、換言すれば、戦間期英国に時間・空間の差異やねじれをとめないながらもみいだすことができるかもしれないアール・デコという大衆化の時代、メディアによって華々しく新たな職種のひとつとして注目され取り上げられた「インテリア・コーディネーター」は、とりわけ女性たちにアピールした。ジェンダー・イデオロギーに基づく職場での差別に直面しつつもあからさまに異議申し立てをすることを差し控えざるをえずそうした困難を乗り越え自らの欲望をかなえようとする彼女たちが、自己実現の可能性として、あるいは、より魅力的な場・居場所のひとつ

として、目を向けたのが、この新たな職業だったのかもしれない。ただし、このインテリアという家庭内部に関わる仕事は、家庭＝私的空間は女性に託されるという近代のジェンダー・イデオロギーを踏襲してしまっているということは少々皮肉なものといってもいいかもしれないが。なぜなら、ジェンダー・イデオロギーにおける差別に対する抵抗のようにみえて、実は、そのイデオロギーに取り込まれてしまったという可能性を孕んでいる危険性があるからだ（とはいえ、興味深いことに、女性インテリア・コーディネーターと男性建築家とのパートナーシップというかたちで実現されたことも少なからずあったようではある）。このような1980年代の日本の文化空間において働く女性のキャリアとして注目されたインテリアに関わる仕事は、実は、戦間期のヨーロッパ・米国において、姿をあらわして流通した職業であったのだ、「レイディ」がお仕事として手を染めても、はしたなくない、ものとして。

4 シリー・モームの出自については、大谷「第5章 変容するロンドンの劇場空間と英国劇作家サマセット・モームのさまざまな価値（その2）——『コンスタント・ワイフ』と働くレイディ」『ショップ・ガールと英国の劇場文化——消費の帝国アメリカ再考』所収で、すでに論じたことがある。一部繰り返しになるが、すこし紹介しておこう。彼女の父親との関係が重要で、彼女の父は、バーナーズという恵まれない子供たちのための慈善団体の創始者であり「日々の聖書朗読・祈り、従順さ、徹底した時間厳守、世俗の快楽——飲酒・喫煙観劇の禁止」を家族に課すアイルランド出身の人物であった。その厳格な父の管理からの自由を求めて、シリーは、米国出身のパローズ・ウエルカム製薬会社（現在のグラクソスミスクラインの起源）をロンドンで創立したヘンリー・ウエルカムと結婚した。だが、期待外れの結婚生活や不貞の疑惑・法定別居という不運の後、シリーは夫から離れてロンドンで、社交界デビューを果たすことになる。自らの存在をアピールするリージェント・パークのヨーク・テラスの住居を、その趣味とセンスでデザインし、社交界ネットワークの仲間入りを試み、ハリー・ゴードン・セルフリッジのデパートメント・ストアでのお買い物という消費行動が重要な意味をもった。このようなシリーのロンドン社交界における存在維持を物質的にしていたマネーとの関係が危うくなったとき、シリーは、著名な劇作家モームとの関係性に公私にわたる立場の安定をもとめ、インテリア・デコレーターとしての地位を確立していった。（大谷：Hastings 174-190. 199-200）。

## Works Cited

Balfour, Patrick. *Society Racket: A Critical Survey of Modern Social Life*. London: John Long, 1933.

"Costume Dramas: The Other Half Lives." *The Economist* 25<sup>th</sup> Feb 2012.

- Hastings, Selina. *The Secret Lives of Somerset Maugham*. London: John Murray, 2009.
- Horn, Pamela. *Country House Society: The Private Lives of England's Upper Class after the First World War*. Stroud: Amberley, 2013.
- Porter, Janet Street. "Why Are We So Obsessed with Servants?" *Mail Online* 16 January 2011. 5 Sept. 2011.
- Sparke, Penny. *As Long As It's Pink: The Sexual Politics of Taste*. London: HarperCollins, 1995.
- Taylor, D. J. *Bright Young People: The Rise and Fall of a Generation: 1918-1940*. London: Vintage, 2007.
- 大谷伴子『ショップ・ガールと英国の劇場文化——消費の帝国アメリカ再考』東京：小鳥遊書房. 2023. (刊行予定)
- 高田英和・大道千穂・井川ちとせ・大田信良編著『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ——英国モダニズムの延命』東京：小鳥遊書房 2022.